

令和7年第3回滋賀県社会教育委員会議 概要

〔日 時〕 令和7年5月29日（木）

13:30～16:30

〔会 場〕 滋賀県北新館5階5A会議室

【出席委員(委員名簿順)】

中北 隆尚 委員	川端 一 委員	橘 円 委員	平松 成美 委員
岨中 庸子 委員	内山 淳子 委員	上田 洋平 委員	中村 一彦 委員
高橋 宏和 委員	梅村 亮介 委員	(10名)	

【その他出席者】

綿谷 駒太郎 氏（滋賀県社会教育委員会議規則 第5条による）

【傍聴者】

1名

1 開 会

- (1) 議長挨拶
- (2) 資料、日程確認

2 議 事

- (1) 提言について

「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について」

～学びを通じた地域社会のつながりづくり～

- (2) 令和7年度の予定について
- (3) 事例報告および審議

報告事例①

～人とここちよくつながる場の創造について～

竜王子育てネットワークと町の社会教育施設の連携 報告者 岨中 庸子 氏

関連報告

「おいかみ食堂」について

報告者 福井 心空夢 氏

報告事例②

「yourship social education」について

報告者 梅村 亮介 氏
綿谷 駒太郎 氏

関連報告

「食の匠の食育出張講座」について

報告者 中村 一彦 氏

3 その他、諸連絡

4 閉 会

- (1) 課長挨拶
- (2) 事務連絡

【配付資料】

- 資料1 令和7年度の滋賀県社会教育委員会議について
- 資料2 令和7年度 滋賀県社会教育委員会議年間予定 概要
- 資料3 これからの社会教育の役割で重要となること
- 資料4 【評価指標】地域への誇りと愛着を育む社会教育チェックシート
- 資料5 「こちよ、つながり」をイメージするキーワード
- 資料6 令和7年 滋賀県社会教育委員研究調査活動（現地視察）実施要項

1 開 会

(1) 議長挨拶

- ・先日、全国の社会教育関係者と話す機会があり、「共に生きることを学ぶ 人として生きることを学ぶ」と題したペーパーをいただきました。「人と豊かにつながる」と言いますが、そのために自分はどのような姿勢であるべきかを、考えさせられました。
- ・これまで「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について～学びを通じた地域社会のつながりづくり～」について審議をしてきました。そして、これからの社会教育の役割で重要な視点を5つに整理したり、それぞれの取組を振り返るチェックシートを活用したりすることにもチャレンジしてきました。
- ・本日は、今年度末に、審議の結果を提言としてまとめることを視野におき、委員からの実践事例を通して、まとめの方向性を確認していきたいと思います。

(2) 資料、日程説明

2 議 事

(1) 提言について

「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について」

～学びを通じた地域社会のつながりづくり～

生涯学習課 林（資料1の説明）

- ・社会教育委員の会議での協議等を、本県社会教育行政施策への反映を期待して、審議テーマについてのまとめと提言を行っていく見通しであることを3月にお伝えしています。
- ・提言については、本県教育振興基本計画 柱Ⅲ「みんなで学びに関わる」において、特に、学びを通して地域社会のつながりづくりをどう推進するかに、大きく関係しています。
- ・今回、提言を仕上げていくにあたって、着地点として、その柱を2つお示しました。一つ目が「こちよいつながり」を生む社会教育。ここでいう、「こちよいつながり」とは、縛らないがつながる、いつでもだれでも、従来の組織や世代にとらわれず、補完し合い、依存し合える関係性です。また、負の感情を抱えないつながりで、滋賀の社会教育で目指す地域社会のつながりのイメージでもあります。その具体が、例えば、多様な出会いの創出、新たな気づきや学びの創出によって、社会教育ネットワークがより多層化、多様化することです。二つ目が、つなぐ、学びに関わる、「脇役的主役（フィクサー、縁出家）、縁出

家の縁は、あえてご縁の縁です。」の人材を育てるです。「脇役的主役」とは、心理的安全性の高い関係性を構築し、「こちよいつながり」を生み出すキーパーソンに期待する姿をイメージしてください。さらに、「支える人を支える」施策に必要な人材であったり、触媒となり、学びやつながりの場をプロデュースする人材であったりもイメージできます。そのような人材の存在により、アウトカムに示されている「地域に誇りと愛着を育む」滋賀の人づくりにつなげます。この2つの柱は、昨年度の皆様の御意見や議論をもとに導き出したものです。

- ・提言の柱をイメージしながら、今年度の審議や今年度の調査研究活動を行っていただくことをお願いします。

川端議長

提言の着地点、まずゴールを一つにイメージした時にということで、昨年度の会議の中でもこの提言の柱の2つの言葉を大事にしてきたように思います。これをもとにしながらゴールを目指していくということの確認を、まずここでさせていただきたいと思いますが、もし何か文言とか、中身の説明のあたりでもう少しこういうあたりを追加したら良いとか、この表現ではわかりにくいというようなことがあったら、お願いをしたいと思いますが、いかがですか。今までからこの「重たくない」という言葉を入れていましたか。

生涯学習課 林

昨年3月の段階で一旦資料を送らせていただいている段階では、まだ入れていたのではないかと考えていますが、どちらかと言えば、なくても良いのではないのでしょうか、明るいイメージで前向きな未来を描いていただくような形が良いのではないかと考えています。そのあたりを皆様に共有していただければと思っています。

川端議長

皆さんからご意見を聞きたいと思いますが、「こちよい(重たくない)つながり」を、「こちよいつながり」を育む社会教育としたらどうですか。何となく皆さんうなずいていただいているように思いますが、よろしいか。“重たくない”、“重たい”のは何やという議論になってくると思いますので、「こちよいつながり」を育む社会教育というのを滋賀の目指す地域社会のイメージにさせていただくということでよろしいか。

では、(重たくない)はとります。

次に、二つ目の柱のところにある「脇役的主役」という言葉は、滋賀独自ではなかったですね。

生涯学習課 林

この「脇役的主役」というキーワードは、令和5年11月に全国社会教育研究大会〔宮崎大会〕の第5分科会で、大分大学教職員大学の清國祐二先生が指導助言の中で、「主役のようにありながら、『名脇役の存在』というキーワードで」というところを説明されるにあたって、

“脇役的主役”と表現されたところから、使わせていただいているというのが経緯です。

川端議長

縁出家の“縁”はこだわりたいと、こういうことですか。

生涯学習課 林

こだわりたいところです。

川端議長

演技の“演”ではなくて、縁を結ぶそういう人材でありたいと、こういう意味です。そうすると、前のフィクサーというのは…

生涯学習課 林

こちらについても皆様で考えていただければと思います。後ろの縁出家はこだわりたいところがあるのですが、フィクサーには多様な捉え方がありますので。

川端議長

脇役的主役（縁出家）でもいいのかと思います、その方がイメージしやすいと思うのですが、よろしいか。フィクサーをとらせていただく方向でどうかと思いますが、いいがですか。うなずいていただいているのでよろしいか。

梅村委員

結構大事なキーワードになるので、括弧で補足するより、「脇役的主役の縁出家」とか、何か一つの言葉にした方がいい気がします。脇役的主役も縁出家も、ワードとしては独自の固有名詞で、括弧の中が補足しているようで補足していません。「脇役的主役の縁出家」というように、変に括弧で挟むより、一つのワードでいいかなという気がします。

中村委員

例えば、脇役的主役の人材を育てる、「人材」という言葉はない方がすっきりするのでは。脇役的主役を育てるという形の方がわかりやすいのではないかと思います。

川端議長

なるほど。「脇役的主役の人」が、「縁出家の人」、そしてさらに「人材という人」の三つがかぶってしまいますね。例えば、「脇役的主役の縁出家を育てる」とすれば、スッキリしますね。

上田副議長

あるいは、「何々を縁出する脇役的主役」という言い方もあるかと思います。そうすると、

主役という人に関わる呼称が、脇役的主役と縁出家と二つ、二重に出てくるのを防げます。

「つながりや学びを演出する脇役的主役を育てる」とか、そういう形だと縁出家の縁出というのは動詞としても使えると思います。縁出という言葉も使おうと思うなら、そういう形もあるかと思います。縁出についても、抽出で説明はしておいた方がいいかもしれません。

梅村委員

良いと思います。「つながりや学びを縁出する、脇役的主役を育てる」。縁出を動詞で使うといいですね。

内山委員

最後に話された「つながりや学びを縁出する」というのは、第一番目の定義とつながってくるので、「こちよいつながり」を生む社会教育と、そして「つながりや学びを縁出する」という形で1番と2番もつながり、とても良いのではないかなと思いました。

岨中委員

わからなくなってきたので、今、自分の中で整理してみました。“縁出する”というのをどのように説明するといいいのかという、次のことを考えていました。

川端議長

では、二重丸の二つ目のところについては、いろいろご意見いただいたものを合わせて整理をする形で、とりあえず、「つながりや学びを縁出する脇役的主役を育てる」という表現でいきたいと思いますが、よろしいか。この大きな二つの柱でいくということは基本的にこのままでいきたいと思います。文言も少し整理して、「こちよいつながり」、そして「脇役的主役」。この二つのキーワードを大事にしながら、この後の事例発表でも、その視点も意識し、お互いを学んでいきます。

(2) 令和7年度の予定について

生涯学習課 林（資料2の説明）

- ・今年度の会議は、2回。本日が第3回目、第4回目は、令和8年1月下旬から2月上旬を予定しています。
- ・調査研究活動として、6月19日（木）に愛荘町、東近江市の現地視察を、すでに案内している。調査研究活動については、皆様それぞれのフィールドで行っていただくとともに、6月12日には、滋賀県社会教育委員連絡協議会主催による研修会が米原市で、9月5日には近畿地区社会教育研究大会が和歌山県で、11月6日開催の滋賀県社会教育研究大会が県庁で開催されます。また、当課主催事業や研修会もあります。なお、11月6日の滋賀県社会教育研究大会については、旅費を予算化しています。また、今年度は8月にZoom会議を行い、調査研究活動の意見交流をお願いします。
- ・今年度末には、県教育委員会へ提言を行うため、そのための確認等をメール等で随時行わせ

ていただきます。最終、滋賀県教育委員会への提言については、議長にお願いします。日程等わかったら、連絡させていただきます。

川端議長

会議は限られています。次皆さんとお会いするのはもう年明けで、1月か2月。もう最初のまとめの段階ということになります。それ以外にZoom会議、また県や社会教育連絡協議会の方で主催する研究大会等に御参加いただきながら、またそれぞれのお立場で活動をしていただくということになります。11月6日の社会教育研究大会はこの県庁で開催します。その旅費については、委員の皆さん全員分は一応確保していただいています。ただ近畿大会9月5日については和歌山県での開催なので、後ほど、有志の皆さんにいただいている活動費の活用について確認をさせていただき、少しでも皆さんに参加していただきやすいように、少し協議をしたいなと思っています。年間の予定につきましては確認ということでお願いします。

(3) 事例報告および審議

報告事例①

～人とこちよくつながる場の創造について～

竜王子育てネットワークと町の社会教育施設の連携

報告者 岨中 庸子 氏

岨中委員

社会福祉法人甲賀学園鹿深の家ということで児童養護施設の心理士に4月1日から、所属が変わったというか転職しました。今現職ではないが、竜王子育てネットワークというところで、ボランティアで居場所活動をしています。今回は、その立場から去年してきたこととお話します。

児童養護施設のことも少しだけお話します。全国的に児童の数の0.1%の子どもが児童養護施設に入所しているという統計があり、1000人に1人ぐらいというところで、当法人にも35～36人の児童がいて、そこで養護の仕事をしているという状況になる。そういうところに社会教育をどうつなげるのかと、何か地域とのつながりを、ということを考えてつつ仕事をしている状況です。

では、人と心地よくつながる場の創造についてのことを、子育てネットワーク、民間の団体と町の社会教育施設、図書館、公民館の連携についてということでお話します。

図書館でまず居場所活動が始まって、親さんの居場所であったり子どもたちの居場所であったり、図書館の居場所を有効活用して民間団体と協働していったということのお話をします。

竜王町の図書館で、「Y o r u c a ?」という居場所活動を2019年の11月から開設されました。図書館としても中学生の居場所が必要だということを考えておられて、中学生の図書館利用の減少等の問題意識から図書館の会議室、視聴覚室を開放してボードゲームができる等の居場所活動をされていました。

実施日時は毎月最終水曜日で、午後3時から午後5時半ということで竜王町の中学校は水曜日に部活がないということで水曜日の放課後に寄ってくれたらいいなということで始まりました。当時の京都新聞の記事の文章を持ってきているが、その当時は図書館が募集した見守りボ

ランティアさんがおられて、ジェンガしたりカロムしたりということで、生徒たちが集まってきたというような記事です。

2019年11月ということで、だいぶ前の話になってきたかなと思いますが、もう年明けたらコロナの時期になっています。そのため、広く宣伝することができなくなって学校もお休みになった時期に「Yoruca？」が開設されており、継続して場所を空けていたので、私はその「Yoruca？」に目をつけていました。スクールソーシャルワーカーとして子どもと個別に相談という形で出会っていたので、何とかそちらで相談というか、そっちに出かけていこうということで、私が活用していたのが始まりです。

関わっていた生徒が、見守りボランティアさんであったり図書館にふらっと来る人たちであったりと交流できたのがすごく大きく、それがしばらく続きました。私の方が子育て、子どもの居場所作りの活動をしていたので、そっちの団体も図書館に参入し、「一緒にやろうよ。」という話になってきました。

最初に言ったように家庭教育支援事業の担当をしていたので、家庭教育支援員さん、サポーターさんも一緒になって…。とにかく居場所があるだけでは絶対つながらないです。それこそ縁出する人がいないと何にも活性化しません。図書館の人たちも図書館だけではできません。マンパワー不足というか図書館の日々の活動でいっぱい、いっぱいです。図書館の外の世界がどんなふうになっているのか、子どもたちの事情がどうなっているのかということが図書館からは見えないということで、みんなが集まれば何かできるよね、ということで…。

2024年度になると、定期的にミーティングを実施しました。「Yoruca？」も、「もっと人を呼んでこようよ。」「もっと何かいいことしようよ。」ということで、図書館と竜王子育てネットワーク、それから行政、教育委員会は学校教育課と生涯学習課が集まって、どんな居場所にしていけるかという話し合いをしました。

やはり子どもたちの意見を聞かないと、子どもたちに「図書館はどんなふうになったらいい？」「何かやってみたいことない？」という意見を集めようということになり、一定期間意見を聞く、付箋を貼っていくみたいなの、ホープの木というのを作りました。希望の木という意味だが、そこに自由に貼って行ってねというようなことをしていました。子どもからは、「泊まってみたい。」「音楽のコンサートもしたい。」とか、また「そんなできひん。」みたいなことをたくさん書いてくれました。“こんなふうになったらいいな”という意見を聞いたのはよかったと思います。

そんな中で、やっぱり何かしようということになって、みんながやってみたいと思うようなイベントを、去年は行いました。夏には図書館で縁日というような行事で、スーパーボールすくい、駄菓子屋さん等、今までの図書館からしたらお金をもらうみたいなのがなかなか難しかったですが、民間の団体が、そういうところを全部担っていただきました。社会福祉協議会の協力もあり、県の社会福祉協議会からもいろんな子ども食堂の関連のお菓子をいただき、そこで「お菓子もらって行ってね。」とか、「ジュースもらって行ってね。」みたいなことも行いました。夏休み行事は、大好評で、冬休みもそのような行事を行いました。図書館としては“子どもたちが来たよ”というだけではだめなので、図書館を巡ってもらえるような仕組みのクイズラリーを作成することになりました。どんなクイズを作ったらいいのか等、図書館の

司書さんたちが一生懸命考えてくださったのが良かったです。わくわくしながらやっておられたなと思います。

秋から冬にかけては、主に竜王子育てネットワークという団体で、編み物（北欧の方でやっていたヤーンボールという毛糸を集めて、それで街を彩る）の活動を竜王町でもやったら面白いなということを発言された職員さん、スタッフがいて、その前段階で「編み物カフェ」をしようということになり、図書館で毎週水曜日の午前中、「編み物カフェ」を会議室で開催していました。編み物をしたい人はやっぱりいます。「何かチクチクしたい。」「私、苦手なんですけど、でもなんかちょっとやってみたい。」という人たち。「何か相談しましょう。」「喋りましょう。」というよりも、図書館を飾るような冬支度の方につながっていくことで手伝いたいという気持ちをお持ちいただいたのか、定期的に来られるようになりました。お茶とかお菓子も出して、活動のための毛糸も町内から集めてきたという取組です。毛糸は結構たくさん集まって、本当に皆さん関心があるというか、いろいろやってくくださったなと思っています。これにも社会福祉協議会に協力していただいて、高齢者の施設でも障害者の施設でもちょっとやってみてもらいたいなど、社会福祉協議会の方から言っていただいて、デイサービスで取り組んでもらって、それがまた図書館や子育てネットワークにやってくるというような感じになっていました。編み物がしたいというニーズで来ておられるので、編み物をしておられるのですが、何か手を動かしながら、なんやかんや喋っておられるみたいな、そういうこちよい時間というか。いろいろな年代の方がおられますし、子育ての話をしたり、介護の話をしたり、自分の身の上話をしたりで、すごく盛り上がって、楽しく過ごしておられる様子がありました。

その後、子育てネットワークの方が、「次は焚き火しようか。」と提案がありました。図書館の横で焚き火しようなんていうのは、最初、私も聞いていて、あそこは風が吹いて大変なのではないかと思いつつも、ちゃんと“焚き火のプロ”みたいな方がいて、焚き火をやって、マシュマロを焼いて、お菓子を持ってきて、お茶入れてみたいなことができました。普段子育てネットワークがやっているスクールに通っている子どもとか放課後の居場所に来ている子どもたちも来ていましたし、編み物カフェに来ていた方も来られるとか、何か焚き火に吸い寄せられて人がやってきました。参加者からは「またやって欲しい。」と。焚き火の話は、上田先生も言っておられたと思うのですが、何か心が気持ち良くなるみたいなことを体験されたようでした。

このような感じで図書館の外側にちょっとポールがあるので、そこを彩って、ちょうど左下の写真の右側にスペースがあるのですが、こちら辺で焚き火をやっていました。図書館の様子を、編み物カフェをしていた人がまた見に来てくださって、図書館に人が来てみたいな感じになっていました。

私が言うまでもないのですが、図書館というのは地域に開かれた“まちのLibrary”ということで、これまでも図書館としてもやりたいことはあったようです。職員さんに聞いていると「これもやりたい。」とか、住民さんからも「コーヒー飲めたらいいな。」とか、いろんな声があったそうです。

今回、官民で協働して、みんなでやっていくという経験ができたので、図書館の方も喜んで

おられました。また、これからもいろんなことをやっていきたいなということをお話し合っていました。

「Y o r u c a ?」で、次、何がいいかなということを考えていた時に、昨年家庭教育支援実践交流会の発表の時に、「次どんなことを考えておられますか。」みたいなことをフロアの方から質問いただいて、その時、「フードパントリーができたらいいな。」というようなことを言いました。もうこれは町の社会福祉協議会に何回も喋っているので、きっと今年実現しているのではないかなと思うのですが、その後どんなふうになっているのかは私がかめていないところです。

公共図書館というのは地域の人々の営みを支えて地域生活を育む期間でもあるよというところですよ。

9ページの方にありますが、チェックシートを使って評価をしています。後で質問があればお願いします。

先月、4月30日が図書館の日でした。今、いろんな図書館ができてきています。いろんな取組をしている図書館があります。私自身、本が好きなので、図書館のニュースをみるのですが、いろんなことにチャレンジしておられる社会教育施設が今、動き出しているということを感じる4月の出来事、ニュースがありました。

ここの図書館、こんなんやっておられていいな、みたいなものを、少しだけ写真をつけています。家庭教育支援事業をやっていた時に、県家庭教育支援アドバイザーの上村さんから言われてきた言葉があります。「一人の50歩。専門職なり担当者がドンと50歩行くのではなくて、50人の一歩でつながりができているということが、いろいろなつながりをさらに広げることができるよ。」と。

私の場合は、相談のケースを持っていたので、その人を囲む仕組みというのが自分一人ではなくて50人。50人の人がつながるみたいなのを目指しながら仕事をしてきたので、この社会教育も一緒だろうなと思ひまして、最後のページに同じ言葉、好きな言葉をここに書いています。

思いがけずいろいろ広がっていて、“ごちゃまぜ”な取組の可能性が大きいなということを感じています。以上です。

川端議長

岨中委員、ありがとうございます。御質問の前に、関連資料ということで、福井委員よりいただいている資料がありますので、事務局より、説明をお願いできますか。

生涯学習課 林

福井委員の資料について概要を報告させていただきます。

福井委員は、2月1日に草津老上まちづくりセンターで実施された「おいかみ食堂」の節分イベントの調査研究活動をされたことを、今回報告していただきました。行事は、センター利用団体の方々が、伝統行事「節分イベント」として実施し、参加する子どもや保護者に食の提供等をされたものです。活動内容には、ゲーム要素を取り入れ、子どもが参加したいと思える工夫があり、活動を通して異年齢、

多世代の地域住民のつながりが生まれていたとのこと。こども食堂でもあり、日常を過ごす居場所となっており、「ここにいていいんだ」というあたたかい感覚も感じられておられます。

このような居場所、取組だけでなく、そこから生まれる安心感やあたたかい感覚からも「地元への愛着」が育まれるのではないかと感じておられます。以上です。

川端議長

では、最初に報告者への質問をお伺いしたいと思います、いかがですか。

平松委員

私は、高島市の図書館を考える会でも活動していきまして、本年度、高島市の協働提案事業に手を挙げる予定です。また図書館と協働でできることをやっていきたいなと思っているところだったので、とてもいい事例を聞かせていただきました。具体的に、いつも図書館を考える会でのバス研修で、どこに行こうかなというようなこともあって、ぜひ図書館に行かせてもらいたいと思いました。岨中委員がいてくださったら、岨中委員に来ていただいて、何かお話していただき、接してもらえたらいいのかなと、ちょっと勝手にいろいろ思いました。図書館でやりたいことはいっぱいあるんだけど、日々の図書館業務でなかなか実現できないところもあるというのも聞いていますし、図書館長さんは今年度2年目。毎月定例会を図書館でさせていただいていますが、館長さんが気軽に来てくださって、情報提供してくださったり、私たちの話を聴いてくださったりと関係もできてきました。そういう意味ではタイミングよく本当にいい取組を聞かせていただいたなと思っています。高島市でもちょっと真似というかそういうことができるなというような、いいヒントをいただきました。ありがとうございます。

中村委員

岨中委員、ありがとうございます。前回、岨中委員と同じグループで隣の席にいた時に、能登半島の地震が起こった後、輪島市の図書館の活動について、岨中委員に記事を渡したと思うのですが、仮設住宅で生活されている方というのは孤独だけれども生きていけるんですね。ただ人というのは孤立すると死んでしまいます。要は人と人とのつながりがなければ死んでしまうんですね。能登半島の輪島市にある図書館もそういった活動をされていました。今取り組まれていることがもっともっと進化していくのではないかと考えていますので、ぜひとも今後の御活躍に期待しております。ありがとうございました。

川端議長

激励のメッセージありがとうございます。

私一つ聞きたかったのは、チェックシート等をつけていただいている中で、これって低いけど、そうでもないのではないかと考えたのが、重点3の居場所づくりのところの「図書館や公民館などの公共施設を活用した居場所づくり」、ここは自己評価が低いのですが…。

岨中委員

もっと、もっと、という気持ちもあるのかなと…

橘委員

これは、他者評価ではなくて、自己評価ですよ。

川端議長

私から見たら、もう少し点数が高いのではないかなと思います。

岨中委員

まだまだと思うところがあるからです。

川端議長

そのままだのところをもし聞かしていただければ・・・

岨中委員

なんででしょう。まだできることがありますよね、というところですかね。頻度であったり、もっといろんな、多世代であったり、まだまだ発展できる場所があるようなので、点数を低くしたんだと思います。

橘委員

これ大体何人ぐらいコンスタントに来られていますか。ムラがありますか。

岨中委員

「Yoruca?」という居場所については、子どもをターゲットにしているので、5～6人ぐらい。編み物カフェは7～8人ぐらい。夏の縁日は50人以上。ずっと通ってきていた子どもたちもいました。学校に行けていない子どもも参加してくれていました。

川端議長

グループで座っていただいていますので、もう少しグループの中で意見交換もしていただけたらなと思います。これから10分ほどですがお時間とらせていただいて、感想も含めて、岨中委員の事例をもとにしながらご自身の取組も関連してお話をいただけたらと思います。

私と上田副議長もグループの中に入れていただきますので、10分後、グループの様子を紹介してください。限られた時間ではありますが、お願いしたいと思います。進行役とか特に決めません。皆さんどんどん喋ってください。

【グループでの協議】

【Aグループ: 上田副議長 中北委員 岨中委員 橘委員 生涯学習課 濱課長】

橘委員

事例発表にあった図書館での焚き火や活動に反対されることはなかったですか。

岨中委員

図書館での様々な活動の実施について反対されることはなかったです。諸機関に許可を取ることでどんどん実施してほしいとの声があがっていたほどです。

焼き芋事業も考えていました。消防に届けを出しました。大学ではこのような活動は大丈夫でしょうか？

上田副議長

大学での焚き火はよいです。ただ、火を焚く目的を求められます。「バーベキューをするので火を焚きたい」というふうになんか何かを焼くための手段として、ということならいいが、「火の傍らで語り合いたい」という理由は認められるかどうか、と言ったことで管理部門と議論になったことがあります。バーベキューになってしまうと、本来の目的からずれてしまいます。こうした議論自体が愉快だが、焚き火をすることはみんなが適度につながる縁出としてよいです。たき火を取り入れることははまちづくりの限界では最近流行になりつつあるように思います。

中北委員

小学校では、昔はグラウンドでキャンプファイヤーをしました。今は焚き火が流行しています。

生涯学習課 濱

図書館を使った良い活動報告をありがとうございました。図書館は公共施設の中でも気軽に行ける施設の1つです。社会教育活動と結びつけるのには向いているのではなでしょうか。

岨中委員

図書館は自由な場所。様々な目的から解放される場所であり安心できる場所。一人で気軽に行けて、過ごせるのが図書館であり、社会の中で重要な場所。長浜の図書館では、子どもが自由に勉強しています。3月になると合格報告にやってくる等の交流が生まれています。

橋委員

一方で、本を読むことを目的にしているだけの図書館も存在します。子どもたちが足を運びにくいきっかけになります。図書館が子どもたちやみんなにとって気軽な場所であってほしいです。

【Bグループ:川端議長 平松委員 梅村委員 生涯学習課 川越総括補佐】

平松委員

図書館について、多様な団体が関わって活動を進めることが、活動の長続きの秘訣であり、広がりの一つになる可能性があると考えています。高島市は広いので、どこでするかも考える必要があります。合併前に各地域に図書館があったが、今は市立図書館としての「図書館まつり」をどうするかという話が出ている。安曇川図書館での「図書館まつり」は安曇川図書館に関わるボランティアが中心となって続けていますが、高齢化してきていると聞きます。市として一つの「図書館まつり」ができるの良い

かもしれません。各地域(6 か所)が、それぞれ関わるボランティアさんが企画する形でも良いかもしれません。まだ具体的な動きは表に出ていないが進めていきたいです。

冬の編み物のようなアイデアは良いですね。高島市は寒い地域なので、編み物が好きな人やできる人がたくさんいます。高齢の方などに本当にできる方がたくさんいます。そうした方々が、子どもたちに教えるといったことは良いかもしれません。昔は小学校でかぎ針編みなどの単元があったが、今はそういうのがないかもしれません。

図書館のお祭りにも、地域の人が来る要素がとても多くあると考えています。

梅村委員

定期的に行われるミーティングで、図書館の利用率などについて行政が集まって話し合っていることが重要であると考えます。これが広がり「キモ」だったと思います。利用がほとんどない状況に気づいた時、図書館の関係者だけで話し合うのではなく、「そうじゃない人たちも入れて」どうすれば良いか話し合いました。その結果、色々なアイデアが出てきた。今回活動が広がった理由はここが「キモ」だったと考えています。

図書館や公民館の利用率が低い課題に対し、担当者はどうしても建物のことだけを考えがちになります。一方で、地域には子育てを応援したいママさんたちがいて、場所を探している。場所代がかかるなどの課題があります。図書館は場所を持っているが、自分たちだけで考えず、「外に広げて」つながりを持つことが重要です。そこを「つなげられる人」がいれば、「もっといろんな人に使ってもらおう」というアイデアが生まれます。ここが非常に重要だったと感じています。

平松委員

小学校で行われた「希望の木」のような、子どもの良いところを付箋に書いて貼る活動は良いアイデア。それをワークショップの一日だけでなく、「いつでもできる」仕組みにするのは素晴らしいと思いました。付箋に書いてちょこちょこ貼れる形。それが集まり、それを見た人がまた意見を出すかもしれません。

梅村委員

イベントだけでなく、普段の活動につながっていくような仕掛けをすることが重要です。そうした意味で、「つなぎ役の人」や、活動を個人的に行っていた人がいることが重要です。やはりそういう「つなぎ役の人」が必要です。誰かが何かを思っても、それに賛同してくる仲間が必要です。一人だけでは難しいです。誰か一人は声を出さなければならないが、その最初の声に対して「それいいね。私も行くわ。」と賛同する“二人目”がついてくるかどうか非常に重要です。一般的に、そういった活動には“二人目”が非常に重要だと言われています。

平松委員

たかしま市民協働交流センターが毎年、市民活動フェスタを開催しており、今年で10回目。40団体ほどが出展します。そうした「場」で他の活動者と出会い、コラボレーションが生まれる。「場に出かけていくこと」でつながりが生まれ、そこでつながった縁が即座ではなくても、後でまたつながっていく面

白さがあります。

【C グループ:中村委員 高橋委員 内山委員 生涯学習課 川口参事・萱原主幹】

中村委員

長浜市立図書館長の図書館の無限大の可能性について触れたいです。社会福祉協議会の活動がエネルギーです。子ども食堂での活動について、ボランティアさんが本を手配し、食堂で本が読める環境があるが、行く機会がない子が多いです。子ども食堂を卒業した子も来ることができ、子ども食堂にいる子に勉強を教える活動もあります。中学生・高校生が自主的に行っているケースや、そこに妊婦さんや高齢者の方もいる場合があります。

高橋委員

図書館が、子ども食堂側へ出かけていくこと、近づいてくことができれば良いと考えています。子ども食堂の開設場所が公共施設として多いのは公民館、まちづくりセンター等です。図書館司書さんの仕事のすみわけや、地域とのつながりや連携について、今後どのように進めていくか、という課題があるように思います。子どもたちに関して体験における二極化が進んでおり、思っているよりもその差が大きいと感じています。

内山委員

公共施設の利活用について、職員の仕事の内訳(業務内か業務外か)についても考えていく必要があると思います。

中村委員

公民館については、積極的なところとそうでないところがあり、施設によって温度差があると感じています。経済格差、学力格差、スポーツ格差が今の社会では存在し、学校の部活動が外部委託されると、余計に費用がかかる可能性があると思います。

内山委員

公共施設を利用した居場所づくりにつながっていることから、官民連携が重要である。子ども食堂の役割も学習支援だけでなく、スポーツ支援も必要になってくるように思います。

中村委員

長浜市フードバンクについては、行きわたらない現状があり、外部の協力を得て行う必要性があります。地域の連携については、滋賀県南部地域はどちらかというと連携している様子があり、北部地域は連携については、まだまだこれからという感じが見受けられます。

【全体への発表】

梅村委員

高島の事例とか、図書館という場所の活用の仕方がすごく参考になったと話をしていました。

特に 3 ページの定期的にミーティングを実施している一つ目がすごく重要だったとっていて、図書館、子育てネットワーク、行政が集まって、どんな場所にしていけるかという話合いを実施したというのが、この広がりキーじゃないかなと思っています。使われてないから図書館をどうしようかということ、図書館関係者だけで話すのではなくて、そうではない人も入れて話したから、もっとこういう使い方をしたいというニーズや、そこからまた次、こんなことしたいというつながりが生まれたのではないかなと思いました。

どういうふうに使いたいみたいなアイデアを、子どもの意見を聞いてみようというのも、そういう場を生んだからできていることかなと思いました。やはりそういうことをする時には、つながりを、広げられる人がすごく重要で、それは別に社会教育委員だけではなくて、いろんなところにアンテナを張っている人にうまくつながって、それだったら、こういうことをやってくれる人いるよみたいなつながりというのを日々持っておけるというのはすごく重要じゃないかなという話をしました。

高橋委員

滋賀県社会福祉協議会の高橋と申します。県社協の方では子ども食堂をずっと広げていて、本日現在で234か所になっています。

今回、図書館を非常に有効活用されているということで、実はこれ県社協の内部でも、子ども食堂と図書館をもっとつなげようという話はずっとしています。図書館に行けたらいいのですが、逆に来てもらう、出張図書館とか、そんな話もずっとしています。また力を貸していただいたりご意見をいただいたりしたいなということを思っています。

また、格差という話になりまして、本を読むということの格差もあるし、県内で南北という格差もあるし、いろんな格差があるみたいな感じで話し合っていました。以上でございます。

橋委員

私が最初に焚き火の話を聞きだしたので、もう焚き火の話しかしてない感じです。学校になかなか行きづらいという子どもが多いです。それでも彼らは何か居場所を求めたり、よりどこを求めたりしています。そのような子どもにとって公共図書館というのは選択肢の一つになりうるのかなという話でした。そういう場所がその公共図書館であるというのは目的を強要しない場所として大変重要なのではないかとことです。

先ほど会議の最初の方に言われた“縛らない関係”、“縛らない社会教育”と図書館の存在は、合致していくのではないかと話をしました。

焚き火も、無目的に見ることの方に価値があるというようなところで、私たち大人も縛られ、いろいろなところにしがらみというか、縛られていたりするので、そういうところから解放され、私たちも解放されたいんだろうなというふうに話をしています。以上です。

報告事例②

「yourship social education」について

報告者 梅村 亮介 氏
綿谷 駒太郎 氏

梅村委員

僕たち一般社団法人「yourship」を昨年立ち上げました。下に“social education”と書いていますが、まさしく社会教育をもっと広げていくためには、その受け皿になるプレーヤー、法人がいるんじゃないかということで立ち上げた団体です。ちなみに今度みんなで現地視察に行く勝光寺が、彼がいるお寺で、僕らの法人の登記場所でもあり、僕らの登記場所を皆さん見に来てくださると思っています。私が梅村です。相方の綿谷です。お願いします。

本業は大学の職員をやりながらこの法人を昨年立ち上げてやっています。社会教育関連で言うと社会教育士というのを一昨年滋賀大学で取得し、社会教育主事講習で綿谷と出会って法人を立ち上げたという経緯があります。社会教育から見ると、今年は4月から守山市のPTA連絡協議会の会長をやっていますので、PTAの方でもいろいろ活動を始めているところです。

綿谷氏

綿谷駒太郎といいます。梅村さんと一緒に法人を立ち上げている傍らですが、滋賀県愛荘町で社会教育委員もしております。実は新しいNPOを作っていて、その幹事に上田先生に入っています。この中のつながりもいろいろあります。先ほど児童養護施設のお話があったと思いますが、私の実家はファミリーホームをやっていて、里親家庭です。その話もできたらいいなと思いつつも、本業は子どもの居場所作りとか探究学習の講座を県や町と一緒に作って作っています。前職が私立小学校の教員をしておりました。

梅村委員

そのような2人です。私たちが立ち上げた法人ですが、何をするかというと、一つは、無数の体験のプラットフォーム構築です。今日この取組の1事例を紹介したいと思っています。二つ目は、イベントの企画運営、司会、モデレーターです。先日、社会教育研修研究大会の時もさせていただきましたが、そういうちょっと前に出るお仕事です。三つめは、これからもっとやっていきたいと思っていますが、社会教育に関する発信、啓発、調査分析です。去年7月に立ち上げて以降、いろんなところで出てやっています。

社会教育と言ってもピンとこない人が私の周りで聞いても8~9割います。なんかふわっとわかる、なんか公民の授業、そんな印象に引っ張られるような人も多いです。そもそも「社会教育というのがあるよ。」ということを広めながらやってきたのがこの一年です。

私たちは子どもたちが、自分はこれが好きとか、これが自分は得意だ、みたいなことに出会えるような体験がとにかく増えればいいと思っています。“体験格差”というワードが先ほどありましたが、その体験格差の解消を学校教育でやるのではなくて、社会教育こそ、それが解決できる糸口ではないかと思ひ、それを作り出そうと、今活動しています。

これは、簡単な事業の概略図です。僕たち事務局と地域住民や企業の方と一緒に講座を作っていて、直近の事業は、学校がやりやすいので学校でやりましたが、地域の子どもたちがそこに参加して体験する活動を、学校の先生だけではなくて、地域の人に関わったりすることこそ社会教育と思っています。そういうプラットフォームを作って、コーディネートし、いろいろな講座を増やしていきたいと思っています。

綿谷氏

どちらにもインセンティブがあるような設計にしまして、地域の子どもたちは体験に出会う場、地域の方とかは好きなことを自己表現できる場と、どちらにもインセンティブがあるように考えています。

梅村委員

これをどんどん広げていきたいというのがベースにあります。まだ 1 回しか講座しておりませんので、その 1 回の講座の紹介をします。

綿谷氏

3 月 21 日に梅村さんの子どもが通われている守山市の立入が丘小学校で体験講座を実施しました。30 名以上の児童が来てくれましたが、これを、学校実施ではなく民間実施でできたことと、講師の方も地元の事業者や、関西みらい銀行などの企業も巻き込んでできたということが、社会教育っぽくて面白い活動ができたと思っております。これが参加してくれた子どもたちの集合写真です。

体験講座ということで、今回三つのテーマで、「アート」「お金」「料理」というのでやりました。左端は、地元の習い事とか子ども食堂をやっている事業者で、真ん中が関西みらい銀行の「お金の講座」です。右端がなんと、梅村さんの奥さんです。

梅村委員

初回なので、心配だから妻にお願いしてやってもらいました。

綿谷氏

その筋のプロフェッショナルで元々お料理のお仕事をされていたというので、講師として来ていただきました。わかりやすく、料理が子どもの口に入るものなので人気でしたが、アートもお金講座も評判が良くて、2 回目、3 回目とやって欲しいということで、今年度につながっております。

地元の住民や企業が先生となって子どもたちに体験機会を提供している写真です。これが教室の写真です。今回はベーコンマヨネーズパンを作りました。ちゃんと生地から練って発酵させて作っています。真ん中が関西みらい銀行のお金の講座で、ゲーム形式で投資とかを学べるような内容になっていて、低学年から高学年まで幅広い年齢層でしたが、うまくゲーム形式でお金を稼いだり、大きく運用したりする楽しさを教えられていました。右端が染物ですね。玉ねぎ染めをしていただきました。この方はすごく慣れてらっしゃって、子どもさんとの関わりもうまいですし、自分のお子さんも子ども食堂のスタッフをされているので、お子さんも巻き込み、子どもを先生にしたりしながら玉ねぎ染めをしていただきました。

梅村委員

このチラシに出ている人たちだけでやったのではなく、実際見ていただいた一番左の写真も、妻や、妻のママ友で、同じ小学校の保護者の方が手伝ってくれたり、関西みらい銀行も CSR の一環、SDGs の一環でこのプログラムをやっておられるのですが、各支店の社員の方々に来て、実際に一緒にグループワークに入ってお金のことを教えてくれました。この写真は、講師と 5 年生の娘さんと、娘さ

んは運営サポートで入っていました。単純に塾みたいに来上がった講座をやっているというよりは、みんなで協力しながら作っているというところも社会教育らしきかなというふうに思っています。とても楽しい雰囲気でした。

綿谷氏

体験を家に帰って話すような仕組みも考えています。私の前職が、時間割とか、校則とかを自分たちで話し合って決める学校「きのくに子どもの村学園」のスタッフで、子どもたちからいろんな会話を引き出したりするのが得意としています。その能力を生かして、ここで楽しかっただけで終わるのではなく、探究的な意味合いも付けるように、子どもたちに今回やったことを家でちゃんと話してもらおうような、子どもたちから話すだけではなくて、保護者の方から子どもたちの何が楽しかったか、何をもっと学んでみたいかというのを引き出すために、振り返りシートを作って、配付しています。あとは保護者の方に写真を配付したのですが、これも他の体験講座と少し違うところだと思います。

梅村委員

ここが、私たちがやる肝かなと思っています。左下の写真も、三つ講座がありましたが、講座を始める前に全員が集合をして、僕たちから、自分の“楽しい”や“好きなもの”を見つける機会にしようと呼びかけをして、各部屋に移動します。体験して楽しかったで終わりではなくて、帰ってからもお父さん、お母さんとか、本当は、私たちが一人ずつどう思ったかの感想を引き出せたらいいのですが、今回は振り返りシートでやりました。写真も、保護者の方は講座で子どもの姿を見ていないので、写真を送って、子どもの様子を見てくださいと、家庭のコミュニケーションの中で、振り返りの機会に使ってもらっているというところが、私たちがこの講座を作っている意味かなと思っています。

この講座は、実際、実現に至るまでの工夫、協力ということで、まず一つ目が組織を横断した人とのつながりにすごく助けられたと思っています。社会教育士となりましたが、まだあまり知られていません。

保護者として、学校から半年に1回ぐらい、お子さんのことでお悩みのことがあればということを書ける文書があり、それを受け取った時に、「その他」にチェックをして、「社会教育士になったので、学校で何かしたいです。」と書いて学校に出したら、すぐ教頭先生が電話をしてくださり、「1回話ししましょう。」と、校長先生、教頭先生から、どういうことをしたいのか思いを聞いてくださり、すぐ公民館とも調整してくださいました。校長先生、教頭先生、市の社会教育の担当者、公民館の職員の方と、どういうふうにできるかという話をしてくださり、そこから何回か打合せを重ねて実際やりましょうということで、何者でもない私が押しかけて行って実現してくださいました。学校って、すごくハードルが高いイメージがあったのですが、そこもアクションを起こせばこうやって組織を超えてつながれるということがありました。

つながれても、やっぱりそうやって協力してくれる方がいないと実現できません。例えば、こういう講座をやりたいと言っても、どうやって情報発信すればいいか。学校がチラシを作ってくれたら配付しますよ、ということで配付してくださったり、保険についても、市の担当者が、市の地域協働活動の保険を適用するので言ってくださいと言ってくださったり、学童に行っている保護者さんからうちの子を行かしたいけど学童中だからどうしたらいいかと言われた時に、学童の先生が、私らがそっちまで行って子どもを送り届けますと言って協力してくださいました。講師は、先ほどのいろんな属性の方やママ友

が協力してくださって実現したということで、ぱっと思いついてやりたいと思ったけれど、いろんな人に支えられた形になっていたという経過があります。

先ほどの社会教育委員会議で使っているチェックシートを入れてみました。こんな図になりました。このチェックシートは本当に意義があるということを前の会議から言っていて、今まで定量化するようなものがなかったので、すごく画期的だと思っていた。このチェックシートで得られる今後の活動への示唆ということで、できていることというよりは、このチェックシートを使うことでこういうこともやれるなという可能性を見つけれられるのに活用できたなと思っています。一つは、例えば、多世代交流の機会という発想で、この講座は作っていなかったの、他の世代の人が先生になるような仕組みとか、他の世代の人がお手伝いで来てくださったら多世代交流の要素に入るよねとか、今回学校でやりましたけど、先ほどあった図書館とか公民館であれば、ある意味そういう社会教育施設を使ったという要素も入れられるとか、今回の講座も単純な料理教室にしましたけど、その地域特性、例えば守山市だったら、ホテルの育成みたいところに絡めたら地域特性にもできるなということで、このチェックシートを使うことで自分たちがやっていることがもっと社会教育としてのこういう可能性があるという示唆を得る機会になったなと思っています。

結局、僕たち単独でこれ全部網羅する必要はなくて、市とか県とか全体でいろんな活動で、このレーダーチャートがどんどん埋まっていくような形になればいいかなと思います。そういう意味では、私たちは、今回はここをすごく出来たんだというふうに思っています。改めて、こういう形で今回の事例をベースに他の学校にも広げたいと思っていて、今年度は放課後を使ってやったのですが、放課後体験教室として今年度展開していこうと思っていて、今回、立入が丘小学校は、年間で午前中に終わる日も聞いたので、年に4回か5回やれたらなということで、年間通してやろうと思っています。一事例できれば、隣の小学校も協力してくださるし、今回の異動で、結構、校長先生や教頭先生も異動され、異動していただいたおかげで、そっちの小学校にも広げられるのではないかと、むしろ異動のありがたさみたいな、横展開をしたいと思っています。

あと守山市の助成金を申請して、それを原資にやっていきたいなと思っています。今後の課題で人・物・金で整理していますけど、やっぱり講師を増やしていく、ラインナップを増やしていきたいなと思っています。2番が一番肝で、学校との折衝とかコーディネートというの私や綿谷がやっていますけど、学校が増えれば単純にマンパワーが足りなくなってきました。こういうところで一緒に社会教育士になったような同期や、社会教育委員の皆さんと一緒にそれぞれが持っている地域の強みとかつながりを生かしてコーディネートしてくれる仲間を増やしたいなと思っています。

あとは、できる場所です。学校、図書館、公民館等いろんな場所でやっていきたいと思っていて、肝はお金ですね。基本的に無料でやりたいと思っています。結局、2,000円3,000円取ると、体験格差、教育格差みたいな話につながってしまいます。私たちが法人としてやることの違いを出せるのはここかなと思っています。補助金を取ったりとか、企業の協賛、今回も関西みらい銀行が協力してくれましたが、企業のCSRのお金をもらって、それで学校に無料で届けるみたいな、今、ここがボランティアに頼っていたり、教育委員会からの予算に頼ったりしているうちは広がらないと思うので、違うところからのお金の流入を生まないと変わらないと思っています。そこをこの一年探りたいと思っています。

綿谷氏

プラットフォームの構築とイベント企画の運営とかモデレーターというのを最初に書かせていただいたのですが、これが明確化した図となります。真ん中には子どもがいて受益者です。その周りにコーチ、スタッフがいて、受益者であり、与える人であり、自分もメリットを受ける人であるというのがこの講師やスタッフです。

その講師はスタッフや子どもを集めて、体験を提供したり、宣伝や CSR をしたりするというのが私たちコーディネーターです。ここがいわゆる子どもの体験、放課後体験教室の部分です。イベント企画とか司会とか講演とかワークショップは、どういう関わりがあるかということ、このスタッフを呼んでくるためのきっかけになるかなと思っております。どんな方もいろんな特技があり、趣味の領域でもセミプロのような方もいらっしゃるって、そういう方とつながれます。また、私たちの活動に共感してくださる方が、こういう場所に行くと、僕たちが思いもしないような方たちに巡り会えるところかなと思っております。ぜひ、こういう司会とか、イベント運営とかあれば呼んでいただけると、子どもたちにゆくゆくは返っていくような仕組みにできていくのかなと思いますので、ご一緒させていただけると嬉しいです。

梅村委員

このスライドで言いたいのは、この真ん中の絵をどんどん大きくして、関係者を増やしたいということです。増やすために、私たちは露出できる場所を探しています。ぜひ何かこういう機会があったら、機会をいただけると嬉しいです。それが体験につながりますよと。

最後になりますけれども、「yourship」は造語で、リーダーシップとか、フォロワーシップとか、何とかシップというのはいっぱいありますが、リーダーシップと言っても、子ども一人ひとり、大人一人ひとりによって違いますし、ぐっと引っ張るリーダーシップもあれば、みんなを包み込むような温かいリーダーシップもあれば、それは結局、リーダーシップという言葉ではなくて、「ユアシップ」で、あなたらしさという、あなた、子ども一人ひとり、大人一人ひとりに違いがあるので、「あなたらしさ」というのを、体験を通して、社会教育を通して築いていければいいという思いを込めて、この名前にしています。以上です。

関連報告

「食の匠の食育出張講座」について

報告者 中村 一彦 氏

中村委員

今日は動画を持参してきました。私たちの活動の思いが少しでもこの動画を通じて伝えられればいいかなと思っております。動画の方はだいぶカットしたのですが、6分我慢いただければと思います。今回動画というのは社内の CSR 研修でも活用しております。

今回のテーマとしては、食育と、先ほど話が出た子ども食堂、この2点に絞っております。食育で何を見せたいかといいますと、当然体験なのですが、一流の大人を子どもたちに見てもらって何かを感じてほしいという思いを持っています。子ども食堂の方については、高橋委員にかなりお世話になっております。もうかれこれ3年で500万円以上、2万点以上の寄付をさせていただいておりますが、まだまだ、子ども食堂の格差というのが大きく、全ての食材が行き渡っていません。これをどういうふうにしていこうかなというのも私としては大きなテーマとして考えております。

動画視聴

中村委員

もう 1 枚、資料をお配りしているのですが、これは全く余談になります。今度、滋賀県で開催されます国スポ・障スポに、プレミアムブースを出す予定をしております。日本スポーツ協会さんから許可が取れまして、健康をテーマに 4 日間、開会式と閉会式ブースを出そうと思っておりますので、ぜひともご都合のつく方来ていただければ、私は 9 時から 17 時まで立っておりますので、ぜひともお待ちしております。ありがとうございました。

【グループでの協議】

【Aグループ：上田副議長 中北委員 岨中委員 橘委員 生涯学習課 濱課長】

橘委員

中北先生に伺いたい。先生の学校に「yourship」のような活動依頼がきたとして、受け入れますか？

中北委員

管理職の懐の深さ、理解力によります。

橘委員

梅村委員、立入が丘小の規模はどのくらいですか？(梅村氏が答える。)

中北委員

本校と同じくらいの規模で564人です。支援学級は5学級あります。授業に前向きに取り組めない児童もみられます。そのような児童に、このような活動は有効なのでは。本物を知ることで感じる力を高めることができます。

上田副議長

昔はあちこちにそのような場所がありました。今は、四角いオフィスの中に仕事が押し込められていることが多いので直接仕事現場(仕事をしている場面)に触れることが少ないです。

中北委員

そのために仕掛けが必要です。管理職の力量が大きいです。体験格差是正のためにもこのような活動が必要なのではないでしょうか。

橘委員

滋賀県では、このような機会はありますか？

濱課長

学びのメニューフェアが県では実施されています。

橘委員

おみこしを組み立てたり、様々な仕事を体験できたりする行事に息子を連れて行った記憶があります。

上田副議長

似たようなイベントが神戸でありました。子どもたちが自主的企画でブースを運営。大人たちはお客さん役になりその活動を全力で応援します。「ちびっこうべ(神戸)」という名前だったと思います。

橘委員

そのような仕掛けをする人が必要になってくるのではないのでしょうか。

中北委員

それこそ地域コーディネーターですね。

上田副議長

学校のできないことを下請け的に実施するのではなく、協働の関係で行いたいです。議論を重ねて同じ立場の関係性で。

中北委員

長浜は学校数が多いが、田根地域で予算をつけて地域コーディネーターに謝金をつける取組を始めました。今年度は10校に広がりました。地域コーディネーターの役割は重要です。

上田副議長

学校活動に協力いただける人や団体のリスト(データベース)があるのもよいと思います。

橘委員

地域の方に学校現場の状況を分かってもらうことも大変です。学校のニーズとのミスマッチが起こります。意識合わせをするのが地域コーディネーターの難しさです。逆も同様で、先生方に地域の思いをどれだけ汲んでもらえるか調整が必要です。

【Bグループ:川端議長 平松委員 梅村委員 生涯学習課 川越総括補佐】

梅村委員

司会業で収益を上げることを主目的とはしておらず、活動を広げることに重点を置いています。活動を通じて直接的な金銭的利益を得ることよりも、まず活動の普及を優先しており、資金は後からついてくるという考えで取り組んでいます。特に小学校で配付するチラシのインパクトと高い効果に着目

し、チラシに企業名を掲載する企業協賛枠を設けることで協賛金を得る計画です。学校における営利活動禁止規定との関連については、子どもの体験格差解消という取組の文脈に乗せることで、企業名掲載チラシの配付が可能になると考えています。

ポータルサイト経由や保護者への配付ではなく、子ども自身がチラシを見て「これに行きたい。したい。」と感じる体験を重視しています。親のフィルターを通さずに、子どもが自分で選択する機会を提供したいと考えています。

「yourship」が段取りや必要な調整を行うことで、地域連携担当の先生と「伴走する」ような関係を築き、誰も損しない連携を目指したいです。

川端議長

学校が学校内だけで完結する時代ではなくなっており、地域との連携が不可欠です。

梅村委員

地域住民は既存の地域活動(例:花の水やり)への関わりが多い傾向にあります。学校が地域住民に気を使いすぎている現状に対し、「一緒に良くしよう」という対等な関係性を築くことが重要です。「やることによって発生するかもしれない責任」ばかりが問われる一方で、「やらなかったことによって失われる機会や経験、そのことによる責任」が顧みられないのはおかしいです。子どもたちの体験機会という観点から、「やらなかったことで子どもたちが体験の機会を失うこと責任」も重要です。

平松委員

問題を心配しすぎるだけでは何も生まれません。新しいことや普段と異なるアプローチで物事を進める際に、「何か問題が起きたらどうするのか」「責任は誰が取るのか」といったリスクや懸念ばかりに焦点が当たり、結果的に何もできなくなるケースが多いです。

梅村委員

可能な限り「やる」方向で挑戦していく姿勢が重要です。

【Cグループ:中村委員 高橋委員 内山委員 生涯学習課 川口参事・萱原主幹】

綿谷氏

食の匠プロジェクトは素晴らしい取組です。「yourship」とは別に、愛荘町で地域の中でゲストティーチャーを招いた活動を行っていますが、中村委員の例のような形になるにはまだ時間がかかると感じています。

中村委員

子どもたちにレストランの総料理長の仕事の様子や、仕事にかける思いを見せたい、触れさせたいと考えています。場所の提供があれば、お金は不要で行っています。親子での活動に対する関心があり、親が参加したいという声もあります。家庭科室に保護者が多く集まるなど、自分の子どもの様子を知りたい親が多いと感じています。

生涯学習課 川口参事

(中村委員の取組は、)学校現場を視察したいという思いが形になりました。既存の社会教育団体を大切にしつつ、新しい風を吹かせてくれる人々も、今後、当課としては支援していきたいです。よりよい社会教育のために何ができるかを考えています。

中村委員

洋菓子はアレルギーで食べられない子どもが多いため、配慮が必要です。小麦や卵、牛乳など、洋菓子は食材に対してのアレルギーが多いです。PTAには熱心な方とそうでない方がおり、保護者によって対応に差があると感じます。地域のお悩みや困っていることを拾い上げることが、新たな取組を生むきっかけになるのではないかと考えています。

綿谷氏

高校の地域コーディネーターや「橋渡し」となる企業との連携ができればと考えており、資金面もカバーできる可能性があります。県から40万円、三菱財団から年間200万円の補助金を得ています。これらの補助金は、地域で活動し物品販売で得た利益をどのように使うかを高校生が考えるという、地産地消の取組に活用されています。

中村委員

愛知高校の南校長と会う機会があり、綿谷氏のことも話題になりました。

川口参事

ここでも人と人とのつながりを感じますね。南校長先生には「学校を核とした地域力強化プラン」推進員も務めていただいています。中村委員の会社の取組は、今後PTA団体との交流・連携を可能にすると感じます。PTAは受け身の体制であったり、組織の土台が弱くなっていたりする現状があります。

【全体への発表】

平松委員

発表してくださった梅村委員がいてくださったので、直接いろいろお聞かせいただきました。「yourship」としては体験格差をなくすために、お金を儲けようというのではなく、企業等いろいろ巻き込みながら、どんどん広げていきたいということをおっしゃっていたので、高島市でも何かお願いできることがあったらぜひ来ていただけるといいなと思いました。

最後に、学校等でいろいろ進めていく時に、「それをしてこういうことがあったらどうするのか」のようなマイナスのことばかり出てきて、できないケースが多いのですが、そういう壁はどんどんぶち破っていきたいという心強い言葉と、やらなかったこと責任ということも出ました。提案に対して、こうなった時どうする、誰が責任取るみたいになって、なかなか理解してもらえない経験があったのですが、逆に、やらなかったことに対する責任、それで子どもたちが体験の機会をなくすというようなこともある

ので、今後またそういう場面にぶつかった時は、今言ってくださった梅村委員からの言葉を上手に使って、子どもたちが少しでも良い体験ができるようにつなげていけたらいいなと思いました。

内山委員

大変パワフルなご発表をいただきましたので、グループでいろいろお話ができました。既存の社会教育団体はたくさんありますが、そちらに加えて新しい風というか、新しい力を持った企業や NPO 団体が非常にいい動き、力強い動きをされているというところを確認しました。今後、そういった新しい風と言われるような皆様、リーダーが既存の PTA などの団体ともうまく融合され、さらに学校あるいは公民館、図書館といった公共施設等との三者でも連携することによって、今回は家庭を良くするというようなところが一つキーワードとして発表にあったと思いますが、それがさらにスムーズになっていくのではないのでしょうか。今後の皆様のご活躍を期待したいというお話が出ました。

中北委員

「yourship」とフジノ食品のとても素敵な取組を紹介していただいて大変勉強させていただきました。本校は、今年度、創立 150 周年を迎えており、先日5月1日が創立記念日で、全校 564 人全員が、運動場に出て航空写真を撮らせていただいたところです。11 月 9 日(土)ですが、その記念のイベントを予定しており、そのイベントの中で PTA が考えている取組の一つに、先ほどの「yourship」のような地域の事業所等と連携して、子どもたちに体験活動をされるというようなことを考えてくださっています。

PTA 会長が前向きな方で、よくテレビで今もやっている「逃走中」という番組があるのですが、それをやろうという提案です。校長も走れと言われております。

先ほどのフジノ食品の取組のことも話していたのですが、中村委員の話の中で、一流の大人と出会うということを話されたのですが、本物の体験をすることがとても大事なかなと思っています。本校の子どもたちの実態を見た時に、学年が上がってくると、どうしても授業に後ろ向きになってしまう子どもたちもいます。そういった子どもたちをどうしていこうかということ、この前、学年主任の先生と話していたのですが、そういったことを考えた時に、やはり子どもたちは本当いろんなことを知りたい、体験したい、学びたいという思いを持っていますが、今の子どもたちを見ていると、その辺もくすぶっているような感じが私には見えます。やはり、心に火をつけていくためには、そういった一部の大人との体験を通して、自分たちもこんなことをやってみたいという憧れを持たせることがとても大事だと思っています。ぜひ学年主任とも相談しますので、またよろしく願います。

川端議長

「yourship」とフジノ食品が、南郷里小学校の 150 周年事業に参加をされているかもしれませんので、ぜひその時は我々もご案内をいただきたいと思います。何か応援できることがあるかもしれませんので、お願いいたします。

それでは今から 10 分休憩をとります。

<休憩>

川端議長

各グループで、事例をもとにした発表をきっかけにいろいろお話をいただいたと思うのですが、内山委員からも情報提供していただけるということですので、よろしくお願いします。

内山委員

内山です。充実したご活動の報告をありがとうございます。実践の中に、主催者のメッセージがとても良く伝わってきました。

今日は、お手元にお配りした資料の説明のお時間をいただきまして、ありがとうございます。お聞きした実践事例は応用編といえますが、この資料は基礎研究のご報告になると思います。

この資料は3月に発行されたテキスト『生涯学習概論』の抜刷りで、編者の許可を得て共有させていただくものです。「はしがき」「奥付」にありますように、編者の鈴木真理先生は長らく日本の社会教育を牽引してこられ、現在は社会教育委員連合の代表をされていますので、ご存じの委員さんも多いと思います。

私が担当した第3章「生涯学習の学習者論」は、学習者・人をテーマとした章です。社会教育のプログラムは、地域特有のニーズである地域課題と、学習者個人のニーズを掛け合わせたものになると言われます。この章では、基本に立ち返って、学習者を中心とした「誰でも・いつでも・どこでも」学ぶ意義を検討しています。僭越ながら簡単に内容をガイドさせていただきます。

はじめの1節は「誰でも学ぶ」です。ご存じのように、生涯教育と言えば合い言葉のようにユネスコ・ラングランが出てきますよね。ここから世界に始まった生涯教育ですが、その後、人権としての「学ぶ権利」が注目されていきます。学習こそが全ての始まりというわけです。そして誰でも学べる仕組みがつかられ、日本でも生涯学習が理念や制度になっていくまでのいきさつを書いております。滋賀県でもこれまで「誰一人として取り残すことのない生涯学習」を掲げて、進めてこられました。

続く第2節は「いつでも学ぶ」です。人の一生を大きく見て、はじめに動物の中で人間ならではの教育の必要性とは何か？ということを考えています。また、42ページの図は生涯教育の黎明期、草分けの研究者である倉内史郎先生が示した「生涯教育の3区分」を紹介しています。この3区分では、それぞれ成長、適応、成熟のための学習が考えられています。ここで注目しているのは、全ての世代で社会化が強調されている点です。子どもの社会化ばかりではなく、大人になっても社会と協調しながら発達していくことが学習の目的とされています。

43ページからの第3節は「どこでも学ぶ」ですが、さらに具体的に年齢区分を設定して、それぞれの時期にどういった学習のニーズと機会があるかをまとめています。長くなりますので割愛いたします。

最終節では、成人教育学と言われるアンドラゴジーを紹介しながら、現代に求められる学びとは何なのかを検討しています。大人の学習の特徴は自律的であること、自己主導的であることとされますが、実は世代に関係なく、言われるままに決まった内容だけを学ぶのではなく、自ら学ぶ意思が大切になってきていると思います。

現代のようにAIやメディアの発達と共存していく中では、どの世代の学習者も、いかに人間らしい「学ぶ意欲」を持ち続けることができるかが大切になってくるのではないのでしょうか。今日のご発表をお

聞きして、仕掛ける側の思いやメッセージは重要だなと感じました。例えば岨中委員は「子どもたちの居場所を作りたい」という思い、「yourship」が重要視されていた「学んだことを家庭に持ち帰って話してください」というメッセージ、中村委員は「一流の大人を見てください」という思い、社会教育は企画者がメッセージを持っていることが学習者を引きつけます。重くなつてはいけませんが、メッセージ性あるプログラムに参加することで学習者の学ぶ意欲が出てくるのではないかと思います。ありがとうございました。

川端議長

ありがとうございました。

よく親は、子どもに「勉強しなさい、勉強しなさい。」と言う。だから勉強するのは子どもの役割みたいに思われています。しかし、実は社会教育に携わる私たちからすると、私たち大人が学び続けていかなかったら子どもたちの学びも当然広がっていかないし、私たち大人の学びというのは、結局自分自身がどう生きるのか、どう生きていくのかということを問い続けていく、そういう営みではないのかと思います。そこを社会教育に携わる者として、私たちがどのような仕掛けをしていったり、今日の柱になっている“脇役的主役”になったりしていくことが大事ということ、理論的に内山委員からお話をいただいたと思います。

大人こそ学ばなければならない時代だと思います。今日最初のところでは二つの大きな柱を確認させていただいて、今いくつかの事例と内山委員のお話もいただきました。全体通してもう少し議論を深められたらと思うのですが、いかがでしょうか。

梅村委員

2年前に綿谷さんと社会教育主事講習を1ヶ月半みっちり受講しました。その時の学びを思い出しました。アンドラゴジーとペタゴジーがあったなど。改めてもう1回、社会教育の資料を見直さないといけないと思っていたタイミングでご紹介いただき、思い出せてありがたかったです。

何か社会教育委員の皆さんに、こういう理論というか、ベースの知識を身につける機会があった方がいいなどお話を聞きながら改めて思いました。そういう機会をくださってありがとうございました。今のこの時間もまさしく僕らが生涯学習している状況かなと思えました。

平松委員

「社会教育委員とはなんぞや。」みたいなことをあまり考えたこともなく教育委員を受けてしまったので、基本から社会教育について学んだり、その本を読んだことが本当になくて、今、内山委員からこういう資料をいただいたので、丁寧に家に帰って読ませていただいたりして、学び直しをしたいと思います。良い機会をいただきましてありがとうございます。

中村委員

何かをするにあたって学びも大事だと思います。ここに「主体的に学ぼうとする意思を持つことが、学習者を中心とした社会を創造する発展につながっていく。」と書いてありますが、何事にもやはり意思を持って行動するというところが非常に大事と思えました。

もう一つは、やはりこういった体系的なロジックをしっかり勉強する、梅村委員も話されましたが、こういったことも必要だということを強く痛感しました。ありがとうございました。

高橋委員

本当に勉強不足というか、私 30 年近く県社会福祉協議会で滋賀の社会福祉と地域福祉の発展に努めてまいりましたが、今、立場が管理的なことや総務的なことになって、柔軟な発想ができずに非常にご迷惑をかけたなと思っています。

ただ、今日話を聞いていた中で、地域福祉と社会教育は非常に近いということで、社会教育ということもしっかり考えていけないといけなけれども、一方でやはり協働、連携というか、両分野をしていくということが子どもの教育にも地域にとっても良くなっていくと、非常に抽象的ですが、そんなことを思いながら今日は参加させていただきました。ありがとうございました。

橋委員

先ほど何か主体的に学ぶ大人の姿というのを、私たちは実践をしなくてはいけないんだけど、仕掛ける側の立場にいる私たちが、関わっていく人たちに対して「主体的に学ぶことは大事なんですよ。」と言ってもなかなか伝わりません。しかし、その人たちに対して価値づけをしてあげられることが大事なのかと思います。「学ぶことは大事ですよ。」と言っても、そのことを肯定的に受け止めてもらえないことが多分とてもたくさんあると思います。でも関わった皆さんの学びや気づきが、こんなに価値がある、こういう価値がある、こんなに素晴らしいという意味を見つけてあげたり、意味があるということ言語化してあげたり、そういうことが私たちにできる役割というか、私たちがやらなくてはいけないことの一つかと、今、お話を聞いていて思いました。

なかなかそれを言える立場を今得ているか、得ていないかということもあるけれども、“一社会教育委員”として、また“一社会教育士”としての一つの生き方かなと。それを担うのが必要なことなのかとお話を聞いていて思いました。

中北委員

内山委員から生涯学習の理論立てたことについて再度お話をいただいて大変わかりやすかったです。その資料の中で、42 ページの倉内先生の社会教育の議論の図があったと思いますが、0 歳で誕生してから 80 歳で死を迎えるまでの成長、適応、成熟というのを見せていただきました。

これがかつて生涯学習課で事業担当させていただいた時に使われたのが、岡山大学の熊谷慎之輔先生です。その研修の中で同じことをお話されたのですが、そのときユングの言葉を使って説明されました。この太陽の動きになぞらえて、その図を説明されたのですが、0 歳から適応の真ん中までが勝負であると、その勝負に行くまでは人生のデータでいうと、上り坂の時で、“俺が、俺が”の時代であると。ところがそこを差しかかって12時を過ぎて最後、日が沈むようになってくると、そのときに成熟という言葉も入ってきますが、熊谷先生が話されたのは、「大人というのは人から必要とされることを通して成熟していく。」ということをお話されました。それが“社会化”ということになるということも思って聞かせていただきました。

併せて熊谷先生は、「学校家庭地域社会の連携・協働」というテーマでお話しされたのですが、今か

ら10年以上も前に、冒頭、「学校という建物が建っている土地そのものを補強しなければいけない時代にもう既になっている。そのために、連携・協働が必要だ。」ということをお話されました。そのことを思い返したところです。私も、自分の立場でまた何をしたいのかということをお話からも追求していきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

岨中委員

今日は私の事例発表も聞いていただけて、それに対してたくさんのコメントもいただいたのが、価値ある時間だったと思います。先ほど内山委員が、事例発表した私も、「yourship」の発表もメッセージや意欲というのが大切だということをお話されて、私自身そのようなメッセージを伝えられたのかなと思いつつ、でも、根本、“これがしたい”というのがあってやった取組だったと振り返っていたところです。そこから、いろいろ人とのつながりができたし、またこれから何かまた違うフィールドで今仕事もしています。しかし、学び続け、活動し続けるという姿を子どもたちにも見せていきたいと思っていますし、見せる場所を作っていきたいということをお話しています。今日はありがとうございました。

川端議長

今日大事な事例発表をしていただいた綿谷さんからもコメントいただいても別によろしいですね。せっかくご参加いただきましたので。

綿谷氏

「yourship」の取組をここに上げていただいて、ありがとうございました。「yourship」はコーディネーター的な役割と思っています。ここにおられる方は、教育の方もいれば、福祉の方もいれば、民間の方もいらっしゃる、いろいろな方が社会教育という名のもとに集まっておられると思います。ぜひ一緒に協働して社会教育という名のもとに学校や地域と連携しながらいいものを作っていけたらという思いが、さらに高まりました。ぜひよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

上田副議長

生涯学習論のはしがきで、鈴木先生が、表面的な理解やいい加減な概念規定、キャッチーな標語もどきのレジャーランドの客寄せに使うかのような言葉遣いや発想そのものが蔓延しているというくだりがあるのですが、本日検討していただいた二つの提言の柱について、これもそういう意味では単なる標語に終わらせずに、我々はその中身を誰よりもよく理解して、皆さんに説明できる、また、率先して実践しているものでなければならないという思いを、これを読みながら新たにしたところがあります。標語の中の“こちよ”つながりといいますが、これは単なる馴れ合いであったり、空気に流されたり、わかるだろうというような一方的に忖度を強いるような“こちよ”とか仲間内だけというフィルターバブルの中だけというようなものであってはならないというふうに思います。

“こちよ”というつながりで思ったのは、前半の図書館のご発表から思ったのですが、“広場ニスト”という方がいて、県立短大の卒業生で山下裕子さんという方が“広場ニスト”と名乗ってやっているのですが、彼女が広場の定義の条件をいくつか挙げていまして、大人がぼんやりしている姿が様になる、用がなくてもとどまれる、いや用がないときに行きたくなる、それが広場だという。あるいは眺めた

くなるもの、視線の行き先や置きどころがある、同時にいろいろな居方ができる、それから、満ち足りて一人にいることも許される、許されるというかそういうことも可能であると。みんなでもいいし、一人でいてもいい、そういう居方が侵されない自由があるとよいと言っています。

焚き火と図書館という話をこのテーブルでしていたのですが、まさに焚き火とか図書館というのは、ある意味広場的である。多様な居方が許される場所である。しゃべっていても黙っていてもいい。何もなしでぼーっとしていると不審がられるが、焚き火があれば、一人でいても怪しまれない、むしろ“様”になる。目的から解放されていく、目的から自由になる。誰もがその場の主役にもなれるし、背景にもなれる、居場所というのはそういうものなんだろうと思います。

それから後の方で“社会化”という言葉を出していただいていた。“成熟”という言葉も今ほど中北委員から出ましたけれども、あるいは大人というのは、一人で何でもできる自立した人間、そうであるという考え方もある一方、むしろそれよりも大人というのは、一人では解決できないような困難な課題をみんなで力を合わせて乗り越えることができる者のことではないか。この表のところでも、確か依存とか相互依存というのがありました。そういう考え方もあると。これもそういう意味ではやはり“社会化”の一つだと思うのです。社会の力で解決をしていくということだと思います。

それからまた少し戻るようですが、社会教育の「yourship」の取組を見ていまして、社会教育の側から学校教育にアプローチして体験格差を埋めるというような場合に、学校からの下請けでもなくて、あるいはせっかく地域の方が保護者の方が言うてくださったのだからといって、その言いなりになるみたいな、そういうものでもない形にするためには、やはり地域の側と学校との意識とか熱意とかイメージの格差を解消する。体験格差の前に、その部分の格差を解消する翻訳者、コーディネーターの存在、あるいはその双方へのリテラシーが必要なだろうということを、あるいはそのリテラシーを高めるための機会を、最後に内山委員のご本を見ながら学んだように、そのリテラシーを高める機会がやはり必要だと思います。

学校も日々変化しているし、社会も変化しているけれども、例えば、社会の側、地域から見ると一般の大人というのは自分が通っていた期間の学校でしかイメージできない部分もひょっとしたらあるかもしれませぬ。そういう意味で相互にアップデートしていくことが必要だろうと思います。

ソーシャルキャピタルということを思うのですが、社会関係資本、人と人が前向きなつながりを持っているということが一つの資本であると考えるときに、これ、いろんなところで喋っていますが、2月に埼玉の八潮市で、下水道管の損壊に伴う道路陥没と転落事故がありました。2ヶ月以上経ってようやく運転手の方が残念ながら亡くなって見つかるけれど、全面復旧にはまだ何年もかかります。その後、大阪でも京都でも水が噴き出すみたいなことがあったのを見て、八潮市の事故は対岸の火事ではなくて、明日は我が身、この私たちのまちでもということです。

これを踏まえてまちづくりというのはやはり地面の上のことだけではなくて、上下水道みたいに地面の下の目に見えないインフラ、これも含めてまちづくりだと、これからちゃんと考えていかないといけないというふうに痛感するわけです。今や当たり前前に思っていたものが液状化してきています。そういう目に見えない都市インフラにしても、普段のメンテナンスをするということが大事だということをこの事故は突きつけています。社会教育に引き寄せて考えると、中北委員が話されたように、社会教育も含めて、その土台が揺らいでいるという部分もあるわけです。人と人のつながりは目に見えないけれども、これも一つの重要な社会インフラだと考えると、やはり都市インフラと同様にそれを安全に健やかに保

つためには、普段・不断のメンテナンスが必要だと思えます。そのためには、やはりいろんな意味で労力やコストも必要になってくるのだらうと思えます。

最後ですが、そういう意味でこの標語にもありますが、つながりを、学びを演出する脇役的主役というのは、そういう人と人とのつながりという非常に重要な社会インフラをメンテナンスしたり、健やかに保ったり、その労力を厭わない、そういう存在であるというふうに思えます。まさに今日私は実感しているんですが、この社会教育委員の会議の場というのが、そういう意味では一つの重要な滋賀にとっての社会インフラでもあるかなと思ったところでもあります。

川端議長

平松委員が、社会教育委員になって社会教育委員とはなんぞやということから始まった。実は、私、県内の市町の社会教育委員の理事の方による社会教育連絡協議会の代表をさせていただいています。6月の研修会で何をしようかと言った時に、テーマがまさに、「社会教育委員ってなんぞや」と。この年度の切り替えで初めて社会教育委員になられた方もおられるし、社会教育に何らかの関わりを持っておられる行政の方とか、いろいろな方がおられます。

その方々に、「社会教育委員ってなんぞや」というところからスタートしようということで、6月12日に米原で行います。そのために、3月に県内の私たちも入れて250名の社会教育委員の方々に、一回、皆さんの体験記を良かったら出してくださいということで応募をかけました。そうしたら20名の方々が、自分が社会教育委員になった時のことや、いろんな不安、やっていること等を情報として提供いただきました。

その中からお二人、その研修会の時に自分の体験記を発表していただきます。年度末の大変忙しい時で、限られた期間でもあったのですが、その20名の方々がよく出してくださったなど、それも何か冊子的にまとめて皆さんに広くお知らせできたらいいなというようなことも連絡協議会では考えているところです。

まさに自分たちが今できることからやっていくという、決して無理はしないけれども、でもこうして皆さんと一緒にやっていくことが、いろんな人たちに良い波及効果を及ぼしたいな、そんな思いはいつも大事にしながらやっている、やっていかななくてはいけないと思ったところです。何となく自分がやっていることで自分だけでできているわけではないので、要するにうまく人を巻き込んでいくということも今日のお話の中から出てきたように思います。

今日、二つの柱に“こちよいつながり”と、“脇役的主役、縁出家”ということで、それを意識しながら皆さん多分お話をいただいたと思います。さらにそれを実際自分たちの目で見確認していく場として6月19日の県内の視察、次は、綿谷さんのホームグラウンドでお会いできるのを楽しみにしておきたいと思っております。

今日は、会議としてはここで終わりにしたいと思えますが、皆さんよろしいでしょうか。それでは、事務局の方に一旦お返しします。

4. 閉会

- (1) 課長挨拶
- (2) 事務連絡